

アジャンター石窟寺院における 小規模寄進について

——寄進銘と大乘仏教——

福 山 泰 子

はじめに

本稿では、アジャンター石窟寺院にみられる紀元前後に造営された前期石窟や開鑿当初の寄進者によって中断あるいは放棄された後期石窟に「割り込み的」に行われた寄進活動に注目し、アジャンターにおける寄進活動の様相を造形と銘文の双方から把握することを目的とする。ここでは、後期石窟への「割り込み的」寄進活動に加え、前期石窟の再荘厳を目的とした寄進活動を総称して「小規模寄進」と呼称する。

仏教学では長年、G・ショペンの碑銘研究によって、アジャンター後期石窟の寄進銘（以下アジャンター碑銘）も頻繁に俎上にあげられ、研究者の注目するところであったが、銘文が記された壁画や浮彫彫刻との関係は等閑視されているように思われる。⁽¹⁾そこで、各窟に残る小規模寄進の壁画や浮彫の特徴およびそれらの寄進銘の特性を整理し、仏教学・仏教史学において議論されるところの寄進碑銘、特に第22窟碑銘の問題を美術史学の視点から再度検討することとしたい。

アジャンター碑銘は、19世紀後半にB・ゲジヤJ・パージェスにより紹介され、その後もG・ヤズダニ編集の *Ajanta* に所収されるN・チャクラヴァルティによる校訂のほか、M・ダバリカル⁽²⁾の補足新出銘文紹介など、多数の著書、論文に収録されている。本稿では、前述の先行研究に加え、近年の研

究のうち最も豊富に碑銘を収録するR・コーエンの博士論文（1995年ミシガン大学提出、未公刊）中の卷末碑銘資料を適宜引用する。⁽³⁾

1. アジャンターにおける小規模寄進の内容と寄進銘文

小規模寄進の浮彫や絵画、またその寄進銘文を網羅的に挙げることは紙面の都合上、困難なため、各窟の小規模寄進の作例と寄進者のタイトルに注目しながらその概要を述べる。なお、寄進銘は剥落や損傷によって全文が判読しうるものは少なく、また若干の構文上の相違はあるが、多くの寄進銘が *deya dharmo 'yaṃ śākyabhiḥsor [x] sya atra puṇyaṃ tad bhavatu mātāpitṛo sarvvasatvānām anuttarajñānāvāptaye* という定型願文を有する。

(1) 第2窟



図1 小規模寄進による壁画
アジャンター第2窟右廊壁

第2窟は仏殿の完成をみたものの、窟内の左廊や後廊左後壁、そして仏殿前室には中断された壁画に隣接する空間、あるいは未装飾のまま放置された壁面を用いて、小規模寄進の壁画が残る。まず、左廊には兜率天上の菩薩をはじめとする仏伝図が描かれているが、場面によっては彩色がなされないまま放置されている。この仏伝図向かって右方に小規模寄進の画像、すなわち、千仏図（実際は、縦10軀・横10軀の計100軀の仏坐像群）と床面に近い部分に横一列に10軀を配した仏坐像群が残る（図1）。このうち後者の仏坐像群には蓮台



図2 舎衛城の神変図 アジャンター
第2窟後廊左後壁

上に寄進銘文が残り、寄進者名に〈釈種比丘 *śākyabhikṣu*〉なるタイトルが付されている⁽⁴⁾。なお、アジャンターの小規模寄進では後述するように、しばしば寄進者と見られる供養者が表されることが多いが、ここには見られない。

次に、第2窟において注目すべきは後廊左後壁で、当初は右後壁と一対となる「守門像」が描かれるはずであったが、石窟の寄進を急いだためにそれが描かれることはなく、造営が一旦終了をみた後に、別の寄進者によって寄進された「舎衛城の神変」図が残る(図2)る小規模寄進

において仏教説話図が選択されたことも留意すべきであるが、ここでは、寄進碑銘は確認できないものの、中央の仏倚坐像の足元に柄香炉を手にした供養比丘が一人、比較的大きく描かれている。おそらくこの人物が同壁画の寄進者であろう。またこの「舎衛城の神変」図の右下方に、同図にやや重なって三尊形式の仏陀像があり、〈釈種比丘〉を名乗る人物の寄進銘文が筆録されている。供養者の姿は現状では確認できない。

仏殿前室(図3)は天井以外、壁面全体が小規模寄進による千仏



図3 アジャンター第2窟前室
および仏殿本尊

図で充満されているが、左列柱柱礎にも三尊形式の説法印仏坐像が表されている。〈釈種優婆塞〉である人物の寄進銘文が蓮台部分に二行にわたって記される。さて、仏殿前室は、本来は第1窟や第6窟のごとく、後壁には「守門像」、側壁には「降魔成道」や「舎衛城の神変」といった仏伝主題が描かれるべきところだが、寄進を急ぐ理由から仏殿前室の荘厳は断念され、その空いた壁面は、別の寄進者によって一部を除き、左右後壁、左右側壁の四方の壁面に同じ工房あるいは同じ画工による無数の仏陀坐像が描かれた。右側壁中央の寄進銘には「千仏」とあるが、四方の壁面の総数はコーエンによれば979軀であるという。右後壁には寄進銘文が3カ所に確認でき、その一つには〈釈種優婆塞〉というタイトルがみられる。

(2) 第4窟

第4窟は後期石窟のなかでも初期に造営が着手されたが、天井が崩落したため造営が困難を極め、最終的には一部の列柱と仏殿本尊を完成させることで寄進に至った石窟である。小規模寄進としては、まず、ヴェランダ入口向かって右方に浮彫の諸難救済観音像があり、浮彫区画上部には開蓮華文の天井装飾が残る。現状で、寄進銘と供養者の姿は見られない。一方、ヴェランダ左後壁には列柱付の龕が設けられ、三尊形式の説法印仏倚坐像が浮彫で表されている。仏陀の背凭れのクッションは浮彫で表されるが、背障の装飾やその後ろに表された扠子を持つ従者は絵画表現による。仏陀が足を置く蓮台の前方には欠損するものの法輪と鹿が看取でき、さらにその前方左右に跪坐すると思われる供養者がみえるが、寄進銘は確認できない。

窟内に目を転じると、仏殿内には未完成のものも含めて合計15例の小規模寄進による仏陀立像や仏三尊像、仏陀坐像が表されている。寄進銘はこれらの仏陀像には⁽⁵⁾みられない。

(3) 第6窟下階

広間後壁の比較的上方、かつ前室に近い位置に小規模寄進の三尊形式の仏陀像が残る。左後壁には、蓮華座に結跏趺坐し說法印を結ぶ仏陀坐像が残る。脇侍は開蓮華上に立つが、うち右脇侍は髮髻冠で肩に鹿皮をかけ、右手を施無畏印にし、左手に水瓶をとる。さらに右脇侍の向かってすぐ左に跪坐して合掌する比丘らしき人物像が、そして左脇侍の足下にも一人の人物が看取できる。しかし、寄進銘はない。

対する右後壁にも同様の図像で仏陀像および脇侍、さらに供養者が表されている。右脇侍の傍らには、豊満な胸を露わにした女性供養者の像がみえる。反対側には比丘と思わしき供養者が手に花を執る様子である。剥落や壁画表面の亀裂も甚だしく、寄進銘の存在は確認できない。第6窟下階には、上記の仏三尊像のそれぞれ上方にまた別の仏三尊像がみられる。

(4) 第6窟上階

石窟造営を順調に進めることができなかったことが窟内外の無数の小規模寄進から窺える。すなわち、仏陀像や菩薩像、過去七仏や弥勒菩薩、あるいはストゥーパ図などである(図4)。また前廊右側壁に設けられた房室の奥壁には仏陀像を配し、さらに周壁を千仏化現のモチーフで覆うという、房室を祠堂に改変した例も見いだせる。小規模寄進の作例は僧院窟のなかでは最も多いが、現存する寄進銘は、わずか2例のみでいずれも〈釈種比丘〉を名乗る出家者



図4 第6窟上階ヴェランダ右方

のものであり、左廊壁に残る諸難救済観音像と、前廊側の右廊壁柱に小さく表された説法印仏倚坐像に伴われたものである。

(5) 第7窟

第7窟の小規模寄進の遺例は、ヴェランダ左後壁の説法印仏陀坐像であろう。元々、仏伝図が描かれていたというヴェランダ壁画は現在では数体の人物像と建築の一部が看取されるのみで判然としない。また、小規模寄進の範疇に入れるべきではないかもしれないが、補足的に述べれば、仏殿前室の左右側壁の「舎衛城の神変」図には複数の供養者の姿がみられ、さらにこのうち右側壁には供養者のなかに比丘も一人確認でき、注目される。

(6) 第9窟

紀元前後の造営から数世紀を経ておそらく当初の壁画は剥落し、表面の状態が劣化していたと考えられる。再荘厳というかたちで列柱や廻廊壁、さらにはストゥーパ後方の壁面に至るまで後期壁画が現在に残る（図5）。特に廻廊壁では、前期壁画の本生図や仏伝図の上から新たに「舎衛城の神変」図や過去仏、説法印仏陀像等が描かれており、現在もその2つの時期の壁画が2層にわたってみられる。列柱に表された仏陀像や菩薩像には供養者が表されており、比丘が多い。寄進銘が確認できる例も認められるが、すべての寄進された壁画に銘が付されるわけではない。窟外壁には供養者



図5 小規模寄進による壁画 アジャンター第9窟後壁

を伴った仏陀立像やストゥーパ図が浮彫で表されている。

寄進銘には、〈釈種比丘〉〈優婆塞〉といったタイトルがみられ、〈釈種比丘〉には〈大徳bhadanta〉〈軌範師ācārya〉という語句が続く場合もある。寄進された壁画主題と寄進者の身分に特別な傾向はみられず、観音菩薩像であっても〈釈種比丘〉〈優婆塞〉ともに寄進している。ただし、第4窟本尊台座の寄進銘と同様に1人の人物名のみを記したとしてもそこに表された供養者の数は1人ではなく、複数名表されることが多い。比丘の場合、それ以外に比丘が表されることもあれば、在家の親族らしき人物の表現もみられる。



図6 小規模寄進による壁画
アジャンター第10窟左列柱

(7) 第10窟

第9窟と同じく前期石窟であるが、第9窟よりも石窟の規模は極めて大きく、列柱にも多くの小規模寄進による仏陀立像や仏陀坐像などの画像がみられる(図6)。廻廊壁は前期壁画が描かれた箇所が大半を占め、ところどころに後期壁画の形跡も認められる。寄進銘をみると、〈釈種比丘〉から始まるものだけでなく、〈釈種比丘〉〈大徳〉を併記するもの、さらに〈軌範師〉を加え、3つのタイトルを記すもの、また〈軌範師〉あるいは〈大徳〉とのみ記すものなど多様である。また、願文に母と父のためと記しているとおり、比丘に加えて在家の男女を表したものが多く見受けられる。

(8) 無番窟(第10窟と第11窟との間)

奥壁には、獅子座に坐し、足を二重蓮華座に置く仏倚坐像が表されてい

る。ここでは脇侍は配されることなく、左右の空間がそれぞれ2つの区画に分けられ、それぞれの上部に仏陀坐像、下部には仏陀立像が配されている。左側壁は開口部付近の下半分を大部分欠損するが、同壁面右下方には地中から伸びる蓮華を手にする女尊像がみられ、上部は区画内にさまざまな姿態の仏陀坐像が2段にわたって表されている。右側壁には、諸難救済観音立像の作例がある。無番窟には、天井画も描かれており、奥壁・左右側壁の三面がひとつのまとまりとして寄進されたことが、現在も確認できる観音開きの扉痕からわかる。しかし、供養者像も寄進銘も見られない。

(9) 第11窟

第11窟はヴェランダ左右や窟内広間の右側壁に配されたベンチ、簡素な列柱、仏殿内の本尊の背後がストゥーパの形を残すことなどから後期石窟のなかでも初期の石窟とみられている。加えて当初の造営活動が終了を見た後、多くの寄進者がこの窟の空間を選択し、仏三尊像のほか、過去仏とみられる仏陀像、「舎衛城の神変」図、菩薩像にいたるまで多種多様な主題で寄進している。ヴェランダ右側壁下方の浮彫(図7)を除けば、多くは壁画である。ヴェランダ左側壁の房室右側には、水難以外の危難の詳細は不明であるものの、諸難救済観音立像が残り、蓮台の蓮弁上に〈優婆塞〉なる人物の寄進銘が確認できる⁽⁶⁾。

また窟内の左後壁には寄進銘を有する三尊形式の仏倚坐像が看取できる。なお、広間の右側壁では、



図7 アジャンター第11窟
ヴェランダ右側壁

「舎衛城の神変」図のうち千仏化現を表した蓮台に結跏趺坐する仏陀が壁面全域を埋め尽くし、壁面中央に三尊形式の仏陀像が供養者を伴って表されているが、寄進銘は見当たらない。左後壁には、仏殿への入口のすぐ左方に「舎衛城の神変」図があり、さらに房室を挟んで、山岳を背景とした三尊形式の仏陀像がある。この仏三尊像の下方に定型願文を含む寄進銘が⁽⁷⁾残る。

(10) 第15窟

広間左後壁に矩形の仏龕が2つ並ぶ。まず、向かって左側の区画にはマカラアーチの下方に蓮華座に結跏趺坐する仏陀像が表され、頭上には宝冠をもって飛翔する矮人形飛天がみられる。仏陀像の印相はおそらく説法印であろう。脇侍は破損が著しいため判然としないが、地面から伸びる蓮華が見られることから、おそらく右脇侍には観音菩薩か蓮華手像が表されていたと考えられる。供養者も寄進銘もみられない。その右側に位置する前室入口に近い龕には、同じく三尊形式の仏陀像がある。観音菩薩とみられる脇侍は髪髻冠で手には水瓶をとる。対となる脇侍は、手に金剛杵をとり、金剛手像であったとみられる。供養者が表されていた否かは現状では不明である。

(11) 第16窟

第16窟は後期石窟の中でも比較的初期に造営された窟であるが、窟内の左右廊・後廊の当初の壁画は途中で終了し、十分に下地処理がなされた壁面空間には小規模寄進による壁画がみられる。右廊の仏伝図に接して描かれているのは、結跏趺坐の説法印仏陀坐像で、天井に近い位置にあるため、コウモリの糞尿害を被って黒変が著しいが、目視では供養者や碑銘の存在は確認できない。一方、左廊壁の後廊寄りには二龍王が支える蓮華座に坐す説法印仏陀像が脇侍や飛天とともに表されているが、同壁画の下部が完全に剥落しているため、当初の様子は不明である。そのようななかで寄進



図8 仏陀坐像 アジャンター
第16窟左廊壁

銘を伴うのが、左側廊壁の仏陀坐像群である。複数とはいえ、寄進者はわずか2名のみで、それぞれの仏陀像に寄進者である自らの名前を筆録させるなど、銘文の数としては極めて多い。

・左側廊①（第三房室の左上方）

結跏趺坐の説法印仏陀坐像が4軀並び、仏陀の左右上方には雲を背に花綱を手にした矮人形飛天がみられる。そして、左端

の仏陀の傍らには比丘らしき人物が合掌して仏陀を見上げる様子である。剝落箇所も少ないため、寄進銘を以下に記す。寄進銘はまず、壁面に向かって左から一軀目と二軀目の仏陀像の下方に設けられた白い区画内に記されている（図8）。定型願文とともに〈釈種比丘〉〈大徳〉なるダルマダッタ⁽⁸⁾の寄進であることが述べられる、さらに先述の4軀の仏陀像のうち3番目と4番目の仏陀像の間に、再び白い区画が設けられ、判然としない箇所もあるが、ほぼ同じ文言の寄進銘が記されている⁽⁹⁾。また、各仏陀像の坐す蓮台の一々に自らの名前を所有格で記す点は注目される。そこでは、「〈釈種比丘〉タルマダッタ」ではなく、「〈大徳〉ダルマダッタ」と記されている⁽¹⁰⁾。

・左側廊②（上記の四軀の仏陀像の上方の仏陀像群）

先に紹介した4軀の仏陀坐像の上方に6軀の仏陀坐像が並ぶ。左端の仏陀の傍らにはやはり比丘とみられる供養者が跪坐して合掌する。このほか、先の4軀の仏陀像の右端に異なる背景色の箇所があり、そのなかにもう一人比丘が比較的大きく描かれている。これがこの6軀の仏陀坐像に関連するものか、4軀の仏陀像に関連するものかは不明である。寄進銘によれば⁽¹¹⁾、〈釈種比丘〉〈大徳〉であるパープカによる寄進であることが知られる。

なお、先のダルマダッタの寄進同様に、各仏陀像の蓮台の一々に名前を所有格で記す。比丘の名前である「パープカ」は4番目および6番目の仏陀の蓮華座上に筆記され、「く大徳」パープカ」は5番目の仏陀の蓮華座上に記される。⁽¹²⁾

(12) 第17窟

第17窟は、アジャンターの造営背景にあるヴァーカータカ朝の地方領主が寄進した窟で、アジャンター後期石窟のなかでもすべての壁面や天井、さらに列柱に至るまで完全に壁画によって荘厳して寄進に至った唯一の窟である。しかし、一カ所のみ、後世の寄進者によるとみられる仏三尊像が残る。それは、左廊の前廊寄りの壁柱正面に描かれたもので、当初の壁画が何らかの理由で剥落し、再荘厳するに至った可能性も考えられる。説法印を結ぶ仏陀は倚坐像で、頭上には連珠やりボンで飾られた傘蓋が掲げられている。左右には脇子を執る脇侍がみられ、右脇侍は三山形式の頭飾をつける。左脇侍は髪髻冠で肩に鹿皮をまとい、左手に水瓶を執る。左右下方にはそれぞれ2名の比丘とみられる人物が看取できる。ある者は供物の花綱を手に、ある者は合掌する様子で、寄進銘はみられない。



(13) 第19窟

第19窟はチャイティヤ窟で、窟内は当初の壁画や浮彫で荘厳されているが、窟外の入口左右およびファサードの側壁、さらには前庭左右の列柱付の祠堂は、仏陀像の形式から考慮して後世の追刻と考えられる(図9)。なかでも、

図9 アジャンター第19窟窟入口左方

ファサード周辺は、仏陀立像や仏陀坐像などが余剰の壁面を用いて刻まれている。「燃灯仏授記本生」図の下方にも空いた空間を用いて3軀の説法印仏坐像が表されている。入口左右の浮彫は殆どが当初の制作であるが、壁柱の柱礎正面の平坦な空間が、後に小規模寄進の空間へと用いられたことは、不統一な区画内に表された仏陀立像によって明らかである。石窟の荘厳もシンメトリーを基本とするが、ファサード正面左右側壁や前庭へ張り出した外壁をみると、様々な大きさ・主題の尊像やストゥーパ図が表され、作例によって供養者の有無がみられる。

また、第19窟の小規模寄進は前庭やファサードのみではない。前庭へは直接下を流れるワゴラー川からアクセスできたようで別に入口が存在する。現在は腰壁が設けられ、入口は塞がれているが、当初の入口左方には小さな仏坐像と、第26窟にもみられる無数の小ストゥーパが確認できる。おそらく石窟としては一定の完成をみた後も、多くの小規模寄進者による寄進が後を絶たなかったようである。

(14) 第20窟

第20窟には石窟の寄進銘とみられる碑銘がヴェランダ列柱に残るが、状態は年々劣化し、文字を判読するのはほとんど困難になっている。先学の校訂から想定される寄進銘では、第4窟仏殿本尊の基壇に記された寄進銘と同様に、定型願文がうかがえる点は留意されよう。⁹⁹

同窟では、ヴェランダと窟内に追刻の仏陀像が見られる。ヴェランダでは、左側壁の房室上部に獅子座に坐す結跏趺坐の仏陀像と供養者1人、さらに左後壁の明かり窓の上部に法輪と鹿を表した台座に坐す説法印仏陀像がみられ、窟内では広間左後壁の仏倚坐像が追刻されている。後者には仏陀が足をおく蓮台の下部に法輪と鹿、その両側に各1人の供養者がみられる。窟内房室は未完のものもあり、広間の左右後壁にも当初は房室を設ける予定であったもののこれは実現せず、¹⁰⁰石窟の寄進後、左後壁に先述の仏陀像が寄進されたようである。これらに寄進銘は現状ではみられない。

(15) 第22窟

第22窟は、石窟自体が小規模寄進であった可能性が考えられる。石窟としては極めて小規模で、広間に列柱もなく、仏殿手前に列柱付の前室もなく、その代わりに列柱付の仏殿が備わる。房室も未完のままで、唯一完成を見たのは入口装飾のみである。とはいえ、決してアジャンター後期窟の後半にみられる何重もの豪華な装飾帯で囲まれているわけではない。一方、窟内は広間壁面全体に土壁が塗られているが、壁画で荘厳された形跡はない。後壁および右壁の一部、そして仏殿に小規模寄進とみられる仏陀像が刻まれている。第22窟については再度論及するため、詳細を述べることにしたい。

・広間右側壁

仏三尊像のうち、説法印仏陀像と仏陀の頭部左右に配された矮人形飛天は浮彫で表されるが、左右脇侍と蓮華座下方の蓮茎を支える二龍王は壁画で表されている。寄進銘は二龍王の下方の白い区画に筆録され、それによれば〈釈種優婆塞〉による寄進であることがわかる。⁹⁹ 浮彫上方には、壁画で蓮華座上に結跏趺坐する説法印仏陀坐像と定印仏陀坐像が交互に3軀表され、さらにその上方にはヤクシャ像とみられる鼓腹肥満の男性像が描かれており、その足下に供物らしきものが看取される。このヤクシャ像の上方にも何か描かれているが判然としない。

・左後壁

左後壁には、壁面の中間に比較的大きな区画を取ってその中に未完の浮彫が残る。おそらく説法印仏倚坐像を予定していたのであろう。この未完の浮彫の上方に付柱付の区画があり、蓮華座に結跏趺坐する説法印仏陀像が脇侍や飛天とともに浮彫で表されている。この区画の横幅に合わせて、そこだけ上方に天井画が描かれている。

・右後壁



図10 説法印仏倚坐像 アジャンター
第22窟広間右後壁

壁面全体を用いて列柱付区画を設け、三尊形式の仏陀像を表す(図10)。蓮池やその中に咲く蓮華の葉の上に供養者を配した異色の説法印仏倚坐像で、台座部分に寄進銘が残る。この浮彫上方には壁画でマカラアーチ、その上に7軀の蓮華座に坐す仏陀像が描かれている。寄進銘は、説法印仏倚坐像の台座のうち、獅子の下方の返花の蓮弁を避けて黒色を背景に白色の文字で2行にわたって筆録され、〈釈種比丘〉⁽¹⁰⁾〈大徳〉のタイトルが見受けられる。供養者は壁面向かって左下に1人、右下に女性らしき人物が2人跪坐するのが確

認できる。

・仏殿右側壁

仏殿奥壁には、獅子座に坐す説法印仏倚坐像が浮彫で表されている。仏陀が足をおく蓮台下には法輪と鹿が表され、その傍ら向かって左に男性2人、右に女性2人が跪き、供物を手にしたり、合掌したりする。左右脇侍の上方には、手前に突出するように男女の飛天が舞う。仏陀の背障装飾のマカラの口から連珠をくわえた鳥がみられることから、アジャンターのなかでも晩期に制作されたことがわかる。仏殿左側



図11 仏陀坐像 アジャンター
第22窟仏殿右側壁

壁には龕が刻まれるが未完である。

寄進銘が残るのは、右側壁である（図11）。仏三尊像のほかに過去七仏と弥勒菩薩が各々の聖樹とともに表される。この作例に相当する部分にのみ天井画も描かれている。なお、寄進銘は「釈種比丘」と大乘仏教の関連で度々議論的になっている。章を改めて論及するが、下記に寄進銘のみ記す。また、このほか、上方の過去七仏と弥勒菩薩の各仏菩薩の名前⁽¹⁷⁾だけでなく、聖樹の名称⁽¹⁸⁾も記されている点が注目される。

TEXT

- L1: siddhaṃ deyadharmmo 'yaṃ śākyabhikṣoniyasya mātāpitṛ...
[u]tranya.[o][sa] rivasatvānām anuttara [jā] nāvāptaye saurupya
saubhāyaguṇopapamṇnā guṇendriye bhāsvaradiptayas te bhavaṃ
nti te nayanābhirāmā
- L2: ye kārayamṭi [ha] ji [nasya] bimbam⁽¹⁹⁾

(16) 第26窟

第26窟ではファサード正面は第19窟同様におおむね造営時当初の計画どおりに守門像としてのヤクシャ像や仏坐像が刻まれたようだが、大チャイティヤアーチの腰壁（図12）やアーチ内側には過去七仏および弥勒や二仏並坐像、ストゥーパ図、諸難救済観音像などが不規則に追刻され、ファサード左右の側壁部分には、決してシンメトリーとはいえない構成で多くの追刻像が氾濫する（図13）。一方、窟内でも身廊部分は計画的な



図12 小規模寄進による浮彫 アジャンター第26窟ファサード腰壁



図13 小規模寄進による浮彫
アジャンター第26窟フ
ァサード左側壁

構成が見受けられるのに対し、廻廊部分は、「涅槃」や「降魔成道」といった仏伝主題に加え、一部に限れば統一感のある仏龕がみられるものの、壁面の多くに大小の仏陀坐像や仏陀立像、過去七仏等が不規則に配されている。こうした小規模寄進の多くに供養者像が表されているが、そのうち寄進銘はわずか3例にとどまる。

・ファサード左側壁

ファサードの小規模寄進のなかでも一際大きな仏陀立像がある。この仏陀立像の足下には寄進者とみられる比丘が浮彫で表されているが、この区画の右側壁には壁画で比丘が跪坐する姿も表されている。この仏陀立像の区画下部に刻まれた寄進銘には、〈釈種比丘〉〈大徳〉のタイトルを付した一比丘の名前が看取できる。

・ファサード右側壁

先の仏陀立像と対称的な位置にほぼ同等の大きさの仏陀立像がある。この仏陀立像の足下にも跪坐する比丘が表されており、区画の下部に寄進銘が刻まれている。

・窟内右廻廊

右廻廊では小規模寄進とみられる仏陀像群が壁面を覆っているが、壁面の空いているところを有効に活用して、天井近くに横並びに弥勒菩薩と過去七仏が表されているが、寄進銘は、比較的大きな仏龕と仏龕の間のわず

かな空間に刻まれた仏陀立像に付随するものである(図14)。当初は仏陀坐像を予定していたが、何らかの理由で中断したことが、あたりを付けた線刻から窺える。寄進銘文は〈釈種比丘〉をタイトルとする人物の寄進であることを述べる。

以上、各窟の小規模寄進の様相を簡略に辿りつつ、寄進銘を伴う小規模寄進のうち重要なものを挙げた。実際、第4、6上階、19、26窟には寄進銘のない小規模寄進が多く、現在アジャンターに残る寄進碑銘の多くはそのうちの一部に過ぎない。明らかなことは、彩色が剥落した



図14 仏陀立像 アジャンター
第26窟右側廊

りあるいは浮彫が破損したりした可能性も否めないものの、供養者の姿が寄進した仏陀像や菩薩像の傍らに必ず表されるわけではなく、また供養者が表されたとしても寄進銘が必須ではなかったということである。それでも、現存する寄進碑銘は、アジャンターの寄進活動の様相を如実に物語っているといえる。その内訳をみると、小規模寄進の銘文53件のうち、33件が比丘による寄進で圧倒的多数を占める。彼らはおおむね *sākyabhikṣu* というタイトルを付ける(23件)が、このほかにも大徳 *bhadanta* (23件)、規範師 *ācārya* (4件) が単独で用いられるか、先の *sākyabhikṣu* とともに併記される。一方、在家信者もわずかながら確認でき、釈種優婆塞 *sākya-upāsaka* (3件)、釈種優婆夷 *sākya-upāsika* (1件)、優婆塞 *upāsaka* (3件) の計7件が現存する。残りの一三件の碑銘は名前やタイトルの部分が欠損しているため寄進主の詳細が不明なケースである。

比丘のタイトルとして頻出する *sākyabhikṣu* について若干の言及をすれば、

寄進銘に類出する *sākya-bhikṣu* / *-upāsaka* というタイトルが大乗を奉ずる人物であるという考えは、ショペン以前にはE・H・ジョンストン、静谷正雄、さらにショペンに対する反論を述べた研究者としてL・カズンズ、R・コーエンなど先学の仏教学研究が知られる。なお、*sākyabhikṣu* の解釈は、大乗仏教を信奉する比丘とみる説のほかに、D・シルカルによる単に「仏教を信奉する、仏教の」といった意味に捉える仏教説や、H・サルカルの遊行僧の団体説があり、いずれも実証的な根拠があるわけではなかったが、カズンズやコーエンは仏教文献以外の資料、例えば、『アルクシャーストラ』『占術大集成』や『十王字物語』等を精査し、*sākyabhikṣu* が仏教の出家者、比丘を示すことを明らかにした。補足的に述べれば、寄進銘に類出する定型願文 *deya dharmo 'yaṃ sākyabhikṣor [x]sya atra puṇyaṃ tad bhavatu mātāpitṛ sarvasvatvānām anuttarajñānāvāptaye* は、〈釈種比丘〉〈釈種優婆塞〉などいずれにも確認でき、寄進者が自らの寄進行為によって「母と父、および一切衆生の無上智獲得」を願う廻向の思想が、出家だけでなく在家にも広く受け入れられていたことを示している。

2. アジャンターの小規模寄進にみる問題—*Mahāyāna*か*Aparaśaila*か—

本章では、仏教学においてアジャンターの碑銘が注目されることとなった、第22窟仏殿右側壁の寄進銘の、とある復元箇所注目したい。当該箇所では、研究者によっては*mahāyāna*と読めるとし、特にショペンはこれが大乗の存在を示す最初期の資料とみた。経典の上では昨今、断片的ながらも中央アジア出土の大乗経典の写本断片が発見され、紀元後まもなくの時期には大乗経典が誕生していたことが窺えるが、一方で、しばしばインド仏教碑銘にみられる「大乗を信奉する」者の存在も、大乗思想の受け手としてその信仰の初期的様相を示す資料として重要視されている。筆者は、アジャンター第22窟の問題の銘文は、先述の第1章では当該箇所が完全に剥落するため除外して記したが、ショペンが依拠した校訂以外にも異なる読み方がなされている。

それは、*AparaSaila*である。*mahāyāna*あるいは*AparaSaila*の可能性、換言すれば、アジャンターという地域性およびアジャンター後期石窟が当時それらの語句が使用される環境にあったのか否かについてここで検討を加えたい。

まず、ショペンはヤズダニの *Ajanta* に収録されるチャクラヴァルティによる校訂「*mahāyāna-yāyaniḥ* 大乘を信奉する者」を参考⁹¹に論を進めているが、チャクラヴァルティが参考にしたのはグリフィスが公刊した初版本の図版である。現在は剝落箇所⁹²にフィリングがなされており、*ma*も確認できず、当時の壁画の状態から推測すると誤読の可能性も十分考えられる。では、*mahāyāna-yāyaniḥ* や *mahāyāna-* というタイトルは、アジャンター周辺の西インドで同時代にも見出せるのだろうか。「*mahāyāna-* 大乘の」や「*mahāyāna-yāyaniḥ* 大乘を信奉する者」というタイトルを有する寄進銘が確認されるのは、ショペンなども指摘するように、東インドのグナーイガル出土の銅板碑銘で、これらはグプタ紀元188年の銘があることから6世紀初頭であることも判明している。銅板碑銘が記す寄進内容は、大乘の釈種比丘・軌範師シャーンティデーヴァのために、*Āryāvalokiteśvaraśramavihāra* (観自在菩薩を祀った僧院) に、大乘不退転の比丘僧伽の所領としての土地の下付をしたというものである。「大乘の釈種比丘・軌範師 *mahāyānika-sākyabhikṣu-ācāryya*、

「*mahāyānika-vaivarttika* 大乘不退転の」として「大乘」の語句が用いられている。グナーイガルはバングラデシュの東に位置する地域で、後に多くの変化観音が生み出される、パーラ仏教が栄える地域の一部でもある。観音菩薩を祀る寺院ということから大乘仏教であることに異論はない。しかし、アジャンター第22窟の欠損箇所を復元するにあたり、比較対象として挙げられたこの東インドの地がアジャンターから極めて遠く離れており、かつ、このグナーイガルの碑銘においても、後述する時代の下る東インドや中インドの碑銘においても、「大乘」を付す際にアジャンターで推定された *sākyabhikṣu* に後続させるのではなく、文法上可能としても *mahāyānika sākyabhikṣu* というように前置れることは注視すべきであろう。このほか、「*mahāyāna-yāyaniḥ* 大乘を信奉する者」を含む碑銘は、興味深いことにいずれも10世紀

から12世紀のパラ・セーナ時代のものであり、カナウジ出土の銘文にみるように釈種比丘と併記される事例もあるが、その他はボードガヤー出土例では比丘（上座）や優婆塞、サルナート出土例では優婆塞や優婆夷といった在家信者と併記され、出家在家にかかわらず用いられている。

以上のように、6世紀の東インドの碑銘に一例のみ *mahāyāna* の事例は見出せるが、その他は地域や時代に隔たりがあり、積極的にアジャンターの当該碑銘中に *mahāyāna* を想定することは難しい。碑銘における「大乘」をめぐる状況はこのようなものであるが、入竺求法僧の記すところはそれに対応するものではない。近年シリーズで刊行された『シリーズ大乘仏教』第一巻冒頭において斉藤明氏が大乘仏教の実態について入竺求法僧の記録を中心にまとめている。アジャンター後期窟の造営年代に前後する法顕と玄奘の記録に限定してみると、『法顕伝』では、アジャンター周辺地域は含まれていないが、西北インドから中インド、東インド、スリランカの状況が語られる。僧院での学習内容に関する記述が多いが、「大乘」「摩訶衍」「大小乗」「小乗」という語句が用いられるほか、さらに寺院や人にも大乘寺、大乘比丘、大乘婆羅門、摩訶衍僧伽藍、摩訶衍人といった用例が確認される。斉藤氏はこれらを整理することによって、次のように3つの特徴を挙げる。まず、「大乘」「小乗」は、出家僧が学ぶべき經典や論書を意味しており、摩訶衍僧伽藍において大衆部系の『摩訶僧祇律』の写本が伝承され、かつ大乘学の対象が個別の大乘經典や論書であった可能性があるという点である。次に、大乘小乗の經論を兼学する寺院が存在したという点、そして、兼学の寺院としてサンカーシャを挙げるが、摩訶衍僧伽藍としては中・東インドの大都市に限定されているという点である。このほかにも摩訶衍人が般若波羅蜜、文殊菩薩や観音菩薩を供養することが記されている。しかし、造形の上で5世紀初頭とみられる作例は殊に前者の般若波羅蜜に限定すれば全く出土していないし、文殊菩薩も5世紀初頭の作例はみられない。

では7世紀前半に入竺した玄奘はどのようにであったか。『大唐西域記』には、インド国内においては仏教ではなくヒンドゥー教が隆盛している様が記

され、仏教の存在は説かれるものの、その荒廃ぶりも伝えられる。そして、法顕が入竺した当時よりも大乘の比率が増し、大乘小乗の用例が57、さらに大小二乗の兼学も14例確認できるという。玄奘はアジャンターを直接訪れてはいないので、アジャンターが兼学か否かといった議論はできない。しかしながら、法顕から玄奘の時代にかけて大小二乗を兼学する寺院が増加していたという流れは注目され、かつアジャンター後期石窟の活動が活発化する前の時代、すなわち5世紀初頭という法顕の時代において「大乘」を名乗る地域が、中インドから東インドに限定されている点を鑑みれば、6世紀の「大乘」を記す極東インド、グナーイガル出土碑銘の存在は地域的広がりがさほど大きくないことを示している。従って、逆に遠く離れたアジャンターの地ではそのような状況ではなかったことが想像され、やはり寄進銘だけでなく入竺僧の伝える大乘仏教の実態からも第22窟碑銘の当該箇所が *mahāyāna* であった可能性は極めて低いというべきであろう。アジャンターに大乘がなかったと言っているのではない。小規模寄進のなかには観音菩薩像に付随する寄進銘もあり、*mahāyāna* と記されずともそれは大乘を信奉する人物による寄進ともいえるし、寄進銘を欠損ないしそもそも記銘していないとしても、別稿にて論じた点であるが、アジャンターの「舎衛城神変」図にみられるように仏世界観の変容に大乘を見出せることを忘れてはならない。

それでは、ここで部派のひとつとして *Aparaśaila*、すなわち西山部と推定する読みについて検討してみよう。コーエンは *Aparaśaila* を採用する。この *Aparaśaila* は西山派という部派のひとつで、南インドのアーンドラ・プラデーシュ州ナーガールジュナコンダの仏教碑銘に頻出する⁹⁶。塚本氏によれば、南インドのガンタシャーラーに1例、そしてマハーラーシュトラのカンヘリーに1例見出される⁹⁷。後者のマハーラーシュトラ州の例については静谷氏によって南インドとの地理的な隔たりを理由として *Aparaśaila* の可能性は殆ど考えられないとされている。しかし、その議論よりも、南インドの例もマハーラーシュトラ州の例も碑銘学に基づけば2～3世紀頃とみられており、実際、アジャンター後期石窟とは300年から400年ほどの時代的隔りがある。

またアジャンター後期石窟と同時期に西山派に言及する碑銘もないことから、積極的に第22窟の当該箇所を *Aparaśaila* とする可能性は極めて希薄といえよう。

以上のことから、第22窟の仏殿右側壁に残る *Sākyabhikṣu* に後続するタイトルについては、現状では判断しかねるということ、そして先学等の研究によって想定される文言についても地域的・時代的な背景を考慮して慎重に検討されるべきであることがいえよう。なお、アジャンターでは *Sākyabhikṣu* に何らかのタイトルが後続する場合には、〈大徳〉 *bhadanta*、または〈規範師〉 *ācārya* という語句が僅かではあるが数例見受けられることも注意すべきである。第22窟の問題の寄進銘はいずれにせよ極めて特異な例であることに異論はないが、既にみたように同時代や地域にみる用例を考慮すると *mahāyāna* と *Aparaśaila* とする解釈には慎重を要するのである。

結びにかえて

以上、アジャンター後期窟の碑銘のうち、壁画や浮彫に関わらず小規模寄進とそれに伴われる寄進銘文中のタイトルにも留意しながら、小規模寄進の様相を確認した。さらに仏教学において碑銘から大乘を語る場合に最初期の例とされてきた第22窟仏殿碑銘の欠損箇所についても *mahāyāna* でも、またコーエンが主張するような *Aparaśaila* でもない可能性も考慮すべきであり、慎重を要することを述べた。

繰り返しになるが、小規模寄進活動の舞台となったのは、前期窟の剝落箇所や、後期窟の造営が中断・未完のまま終了した石窟の空いた壁面であり、そこに「割り込み的」に彫像や画像が寄進された。これに関してスピנקの注目すべき指摘がある。当初の造営活動の中断・放棄といっても、それは本尊である仏陀像やストゥーバが祀られた石窟にのみ、小規模寄進活動が見受けられるというのである。それはすなわち、どのようなかたちであれ石窟が寄進され、僧団に帰属するものとならなければ、寄進の意義を見出せなかつ

たということであろう。さらに言えば小規模寄進は、好き勝手になされているかのようにみえようとも、寄進のための区画と主題を認可する権限を有した僧団の意向に従ってなされたものであったということが推察される。これらの小規模寄進は、まず石窟内の位置としては、滑らかに整えられた壁面あるいは下地が既に施された壁面であり、かつ石窟の入口と仏殿を結ぶ中心軸に近い、人目に触れやすい場所を選択して制作している。時には、既に寄進された壁画を塗りつぶすかたちで別の壁画が寄進されるというケースもあり、窟内の秩序が崩壊している場合もみられる。一方、寄進の主題内容としては、大画面である場合は第2窟後廊にみられるような仏伝主題「舎衛城の神変」図や、第6窟上階にみるような房室全体を「舎衛城の神変」として祠堂化したものもあるが、多くは、かつて石窟入口や祠堂入口の装飾モチーフとして見られた「過去七仏および弥勒菩薩」や壁面を覆わんばかりの千仏、或いは三尊形式の仏陀像、諸難救済観音像、危難を表さない独尊の観音菩薩像、ストゥーパ図などがみられ、寄進銘が伴われる場合とそうでない場合が両方ある。

仏教碑銘にみられるタイトルや「無上智獲得」という廻向の内容も寄進者の信仰の様相を知る上で重要な論点ではあるが、碑銘を有するものはいうまでもなく、碑銘を伴わない小規模寄進の図像も看過してはならない。しかし、碑銘研究者や仏教学研究からはこうした図像は殆ど除外されて議論がなされている。「舎衛城の神変」図の図像的發展過程を顧慮すると、三尊形式の図像に遍満する宇宙的な仏という、大乘的な壮大な仏世界観が萌芽している現象は重視されるべきである。このような造形上の大乘的要素から見た場合、出家在家にかかわらず、寄進者らが視覚的に、おそらくより容易に理解しうる仏世界観を受容していなかったとは言い切れまい。

今回、筆者は寄進銘がどのような尊像に付随するものかを整理し、寄進の証である石窟それ自体・浮彫彫刻・壁画と寄進銘を対照し、従来の見解との矛盾点などを呈示したに過ぎない。今後、仏教学研究との統合的な地域研究が実現できれば、新たな研究の展開の可能性が期待できるように思われる。

近年の仏教学における研究成果が明らかにしたように、大乘仏教の存在形態、すなわち初期においては大乘教団というものは存在しなかったということ、基本的には大乘は独自の律をもたず、大乘比丘が遵守した律は、みずからが所属する僧院が保持していた伝統的部派の各律に基づき、出家者はそのなかで大乘經典や論書を学んでいたこと、つまり大乘と部派が共存していたという状況は、まさにアジャンターの『根本説一切有部毘奈耶』に依拠した仏教説話図を含む石窟芸術にみる説一切有部との関連と、小規模寄進にみる宇宙主的釈迦への展開という、それぞれ部派仏教と大乘の併存という状況にも合致しているといえよう。

略号

- AJ2: John Allen, "A Note on the Inscriptions of Cave II," Appendix to G. Yazdani, *Ajanta*, vol. 2, London: Oxford University Press, 1933.
- AJ3: N.P. Chakravarti, "A Note on the Inscriptions in Caves VI-XVII," Appendix to G. Yazdani, *Ajanta*, vol. 3, London: Oxford University Press, 1946.
- AJ4: N. P. Chakravarti & B. Ch. Chhabra, "Notes on the Painted and Incised Inscriptions of Caves XX-XXVI," Appendix to G. Yazdani, *Ajanta*, vol. 4, London: Oxford University Press, 1955.
- BCTTI: James Burgess, *Report on the Buddhist Cave Temples and their Inscriptions*, Archaeological Survey of Western India, vol.IV, Varanasi: Bharatiya Publishing House, 1975, First published 1883.
- CII: Vasudeva Vishnu Mirashi, *The Inscriptions of the Vākāṭakas*, Corpus Inscriptionum Indicarum, vol. V, Ocatamund: Government Epigraphist for India, 1963.
- DAJI: Bhau Daji, "Ajanta Inscriptions," *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*, 7 (1863): 53-74.
- EI33: Dinesh Chandra Sircar, "Inscription in Cave IV at Ajanṭā," *Epigraphia Indica*, 33 (1959-60): 259-262.
- EI37: A. Ghosh, Two Early Brahmi Records from Ajanṭā, *Epigraphia Indica*, 37 (1967): 241-244.
- FAI: James Prinsep, "Facsimiles of Various Ancient Inscriptions,"

- Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 5 (1836): 348-9, 556-561, plate ix, #4, plate xxviii, #9, #10, #11.
- GCI: Vasudeva Vishnu Mirashi and P. Sreenivasachar, *The Ghatotkaca Cave Inscription*, Hyderabad: The Archaeological Department, Government of Hyderabad, 1952.
- ICTWI: James Burgess and Pandit Bhagwanlal Indraji, *Inscriptions from the Cave Temples of Western India with Descriptive Notes*, Delhi: Indian India, 1976, First published 1881.
- KERN: Hendrick Kern, *The Jātakamāla: Stories of Buddha's Former Incarnations, Otherwise Entitled Bodhisattva-avadāna-mālā*, by Ārya Śūra, Harvard Oriental Series, vol.1, Cambridge: Harvard University Press, 1891.
- NIA: M. K. Dhavalikar, New Inscriptions from Ajaṇṭā, *Ars Orientalis* 7 (1968): 147-153.
- NOTES: James Burgess, *Notes on the Bauddha Rock-Temples of Ajanta, their Paintings and Sculptures and on the Paintings of the Bagh Caves, Modern Bauddha Mythology, etc.* Archaeological Survey of India, No.9, Bombay: Government Central Press, 1879.
- STUIDES: Dieter Schlingloff, *Studies in the Ajanta Paintings: Identifications and Interpretations*, Delhi: Ajanta Publications, 1988.
- TJ: Cohen, Richard Scott, *Setting the Three Jewels: The Complex Culture of Buddhism at the Ajanta Caves*, 1995, UMI
- 定方 定方晟「アジャンター刻文の和訳」『東海大学文学部紀要』46, 1986, pp. 108-96.
- 静谷 静谷正雄『インド仏教碑銘目録』II: グプタ時代仏教碑銘目録; IV: 増補, 平楽寺書店, 1979.
- 塚本 塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究』I, 平楽寺書店, 1996, Ajanta (pp. 359-387).

註

- (1) Schopen, G., Mahāyāna in Indian Inscriptions, *Indo-Iranian Journal*, 21, 1979, pp. 1-19. グレゴリー・ショペン, 小谷信千代訳『大乘仏教興起時代 インドの僧院生活』春秋社, 2000.
- (2) 文末略号に記した文献を参照されたい。
- (3) Cohen, R.S., *Setting the Three Jewels: The Complex Culture of Buddhism at the Ajanta Caves*, UMI, 1995.
- (4) 挿図は国立文化財機構・東京文化財研究所およびインド考古局 (Archaeo-

- logical Survey of India) による共同事業の一環として実施された高精細画像記録の一部である。TJ 11. Cf. AJ 2: 63, #8; 塚本 Ajanta 8.
- (5) 第4窟に現存する唯一の銘文は、仏殿本尊の台座にみられる寄進銘である。寄進者の属する集団や某の息子といった家系、さらに〈僧院主 vihārasvāmin〉といった説明に続いて、小規模寄進の寄進銘文にみられる定型願文と同じ願文が続く点は注目される。寄進者名は人物1名のみであるが、台座前には10余名もの供養者が花綱を手にしたたり合掌したりする。おそらく寄進主の親族を表したものであろう。
- (6) TJ 63
- (7) TJ 65
- (8) ICTWI: 87, #27; AJ 3: 95; #1; TJ 70; 静谷29; 塚本53
- (9) DAJI; ICTWI: 87, #26; BCTTI: 138, #15; AJ 3: 95; #2; TJ 71; 静谷29; 塚本54; 定方15
- (10) AJ 3: 95; TJ 72
- (11) DAJI; ICTWI: 87, #25; BCTTI: 138, #14; AJ 3: 95; #1; TJ 73; 静谷28; 塚本55; 定方14
- (12) AJ 3: 95, #3; TJ 74
- (13) DAJI (called "Cave XIX"); ICTWI: 76, #5; BCTTI: 132, #5; AJ 4: 113; TJ 84; 静谷33; 塚本65; 定方5.
- (14) 右奥壁には扉の形ほどの壁面の大きさの盛り上がりがあり、おそらく同窟に特徴的な房室上部の装飾のために残したものと考えられる。
- (15) TJ 88
- (16) NIA: 151; TJ 89
- (17) DAJI(Cave XXI); ICTWI:88, #30; AJ 4: 111-112; TJ 91; 静谷34; 塚本 67
- (18) AJ 4: 112; TJ 92; 静谷34; 塚本34
- (19) DAJI (called Cave XXI); ICTWI:88, #30; AJ 4: 112; TJ 90; 静谷34; 塚本67.
図版は、DAJI (called Cave XXI); ICTWI: Cave XXII, #30; John Griffiths, The Paintings in the Buddhist Cave-Temples of Ajanta, vol. 1(London: 1896): plate 91 (但し、初版本においてのみ確認可能); AJ 4, Pl. I (但し、Griffiths図版の複写)を参照。和訳: [成就あれ。] これは釈種比丘,の寄進物であって、……母と父……一切衆生の無上智獲得とならんことを。これにおいて勝者の像を造立せしめる者は、美しい容姿と幸運と福德を成就し、感官において太陽のごとく輝き、それらは目に喜びとなる。
- (20) DAJI (called "Cave XXV"); ICTWI: 79, #7; BCTTI: 136, #7; AJ 4: 118-9, #2; 静谷36; 塚本69; 定方7
- (21) DAJI (called "Cave XXV"); ICTWI: 80, #8; BCTTI: 136, #8; AJ 4: 119-120, #3; TJ 95; 静谷37; 塚本70; 定方8

- ②② ICTWI: 80, #9; BCTTI: 136, #9; AJ 4: 120, #4; TJ 96; 静谷38; 塚本71; 定方9
- ②③ このほかに、第10窟の仏坐像寄進銘に(熱心な)優婆塞 [*para*] *mopasaka* なる筆録銘があったとするが(Chakravarti, N.P., A Note on the Painted Inscriptions in Caves VI-XVII, Appendix to G.Yazdani, *Ajanta*, vol.3, 1946, London, p.21), 現存しないためここでは割愛する。同様の形容辞句は第20窟寄進銘にも看取される。
- ②④ Schopen, G., *Mahāyāna in the Indian Inscriptions*, *Indo-Iranian Journal*, 21, 1979, pp.1-19; Two Problems in the History of Indian Buddhism: The Layman/ Monk Distinction and the Doctrines of the Transference of Merit, *Studien zur Indologie und Iranistik*, Heft 10, 1985, pp. 9-47. 1979年の論文において、シュopenは大乗に言及する6~12世紀の銘文と、大乗的呼称を含むとする4世紀以降の銘文を対象にインドにおける大乗仏教の様相を考察している。
- ②⑤ Johnston, E.H., Some Sanskrit Inscriptions of Arakan, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 11, 1943-46, pp.357-385. ジョーンストンは、碑銘にみる 'deya dharma' yam yad atra puṇyam tad bhavatu x' = 「これは……の寄進物である。ここにある功德のすべてがxのためになるように」が「大乗的定型文」と指摘した。
- ②⑥ 静谷正雄「インド仏教銘文に見出されるŚākyabhikṣu (釈種比丘) なるタイトルについて」『印度学仏教学研究』第一巻第二号, 1953, pp. 104-105; 同, *Mahayana Inscriptions in the Gupta Period*, 『印度学仏教学研究』第一〇巻第一号, 1962, pp. 358-355.
- ②⑦ Cohen, *op. cit.*, pp. 194-270; Cousins, L.S., Śākyabhikkhu/ Sakyabhikkhu/ Śākyabhikṣu: a mistaken link to the Mahāyāna, Nagoya University, *Studies in Indian Culture and Buddhism*, *Samhāsa* 23, 2003, pp. 1-27.
- ②⑧ Sircar, D.C., *Indian Epigraphical Glossary*, 1966, Delhi, p.287.
- ②⑨ Sarkar, H., *Studies in Early Buddhist Architecture of India*, 1966, Delhi.
- ③⑩ 後半部分の廻向の対象について、構文の異なる例もある。例えば, *mātāpitaram purvvaṅgamaṃ kṛtvā* (母と父をはじめとする) とする例が第26窟ファサード左側壁の銘文にみられる。アジャンターではこの一例のみであるが、対面するほぼ同規模の仏陀立像の寄進銘もこの形式の構文を取っていた可能性もある。また、西インドではコンカン地方のクダー第6窟にこの形式の構文が数例見出せる。
- ③⑪ Chakravarti, N. P. and B. Ch. Chabra, *op.cit.*, 1955, p. 112.
- ③⑫ 塚本前掲書, pp. 168-172; Guṇāghar 1 参照。
- ③⑬ 塚本前掲書, pp. 612-613; Kanuj 1 参照。
- ③⑭ 塚本前掲書, pp. 146, 151-153, 905-907, 917-918; Bodhgaya 28, 36, 37; Sār-nāth 46, 51, 111 参照。

- ③⑤ 齊藤明「第一章 大乘仏教とは何か」桂紹隆・齊藤明・下田正弘・末本文美
士編『シリーズ大乘仏教 第一巻 大乘仏教とは何か』春秋社, 2011, pp. 3-38.
- ③⑥ 塚本前掲書, pp. 316-317, 320-325, 341-346, : Nāgārjunakoṇḍa 6, 14, 18, 20,
21, 51, 53, 54参照。Aparamahāvāṇasāliya (西方の大林堂居住者;西山部)と
して記され, いずれも3世紀頃とみられている。
- ③⑦ 塚本前掲書, pp. 299, 437-438: Ghaṇṭasāla 4, Kanheri 38参照。
- ③⑧ 代表的なものとして第17窟中央入口装飾の過去七仏と弥勒菩薩が挙げられる。
- ③⑨ 第4窟ヴェランダ右壁, 第10窟と第11窟の間に彫られた無番窟右壁, 第26窟
右翼左壁の上下二段が挙げられる。

キーワード アジャンター石窟, 寄進, 寄進銘, 釈種比丘